A5判・288頁・3520円
晃洋書房
978-4-7710-3593-5
TEL.075-312-0788

日本の性を考える基本文献

ドイツの性文化を通して、日本のセクシュアリティの構図を明らかに

斎藤光

日本語文化圏では自分のセクシュアリティの表現や非内面化そして言語化困難性が問題である。そのためセックスレス状況になると、二人、またはカップルのどちらかがカップル間の性の充実を願ったとしても、カップル間コミュニケーションが不成立に終わりがちになる。結局、コミュニケーションの成立よりは、ジェンダー規範・ジェンダー役割・社会規範を参照することになり、充実は選択されない。

このあり方は、ドイツあるいは西欧の「性的主体」というものと大きく異なる。著者はここに新しいセクシュアリティの方向性を見てもいるが、果たしてそうであるのか、さらなる探求と議論が必要であり、それを期待したい。

いずれにしろ、日本の性を考える基本文献である。（さいとう・ひかる＝京都精華大学教授・科学史・科学論）

★パッハー・アリス＝明治大学助教・社会学。論文に「新型コロナ感染症流行下での日本人のセクシャリティとカップル関係の関係性」など。

問題の根深さ、重さを再認識させる労作

最新の関連文献を綿密丁寧に読み込み追究分析

芝健介

四六判・308頁・2750円
春風社
978-4-86110-805-1
TEL.045-261-3168

本書はホロコースト（ナチ体制によるヨーロッパ・ユダヤ人の大量虐殺）について、犬塚叢書の専門教養テキストタイプとしては内外最新の関連文献を細大漏らさず綿密丁寧に読み込んで総合的に追究分析した、問題の根深さ、類を見ぬ重さを再認識させる労作である。

ヒトラー第三帝国の思想と行動を、ユダヤ人絶滅の狂気ととらえるのは、実態を見誤るものであって、ユダヤ人殺戮はそれ自体独立した目標ではなく、ドイツ民族帝国主義（ナショナリズムと帝国主義の融合）の政策体系の一手段と位置づけて初めて歴史の流れが把握できるという年来の立場が本書にも貫かれているが、ユダヤ人迫害の分析対象地域がこれまでのソ連中心の御自身の大著と比べても、オーストリア、チェコ、メーメル、ポーランドといった中小の併合占領地域に重点がおかれており、しかも他の類書や研究にもそうそう見られないような密度で詳解されている。そこに、今回の新著の第一の特徴が見られるといえよう。これは著者の知人で著者による訳稿（「ホロコースト研究の歴史と現在」）もある史家ウルリヒ・ヘルベルトたちの編集による浩瀚な独語公刊史料集『ナチ・ドイツにおけるヨーロッパ・ユダヤ人の迫害と虐殺 一九三三～一九四五年』全一六巻（二〇〇八～二〇一六年、オルデンブルク出版社、未邦訳）を、縦横に著者が先駆的、効果的活用を果たしえた本書第二の特質とも大きく関わっていると思われる。

第一次世界大戦開戦時と比較し、第二次世界大戦開戦（ナチ・ドイツ軍の対ポーランド侵攻）時の一九三九年九月、ドイツ住民の間に戦争熱狂がみられなかったのは今日よく知られているが、次のようなポーランド・ユダヤ人の状況については、本書ではじめて知るという読者も少なくないのではなかろうか。一九四一年春、ナチ国家指導部と国防軍が対ソ戦準備を開始して数か月、ポーランド・ユダヤ人がそれを直接肌で感じなければならなかった大量殲死状況や、にもかかわらず独軍の対ソ攻撃開始の報が当初多くのユダヤ人の間によろこびと、期待先行の「ドイツ敗北」の噂の広まり、ソ連軍勝利後の将来への希望さえ引き起こしたというリアクションが、その後の幻滅、戦闘続行、独軍のための冬季衣類供出大キャンペーンの下なけなしの毛皮の徹底的押収等含むゲットー住民の酷薄な日常と随伴生活感情が微細に描出されている。

絶滅政策への「大転換」にかかわる根本決定がいつだったのかという問題そのものについては、四二年一月二〇日のヴァンゼー会議で決定されたという誤解が日本含め世界の人口に膾炙した見方としてまだかなり一般に通用しているといっても過言ではない。ヒトラーが対米宣戦布告を断行した直後の一九四一年十二月半ばというのが、本書でも再確認されている著者の立場であり、著者によれば、欧米の研究

（ナチ・ドイツによるヨーロッパ・ユダヤ人の迫害と虐殺 一九三三～一九四五年』全一六巻（二〇〇八～二〇一六年、オルデンブルク出版社、未邦訳）を、縦横に

永岑 三千輝著
アウシュヴィッツへの道

ホロコーストはなぜ、いつから、どこで、どのように

ものとなった。

第一部の先行研究の整理では21世紀日本の性状況のアウトラインが示される。データなどの不足でその総体は霧に包まれたままだ。ただ、全体社会の「性」状況が「脱性」に変容していることはわかる。若者における「キス経験率」「性交経験率」の減少がそれを示唆する。それまで一貫して上昇してきた経験率は、2005年を境に下降に転じているのだ。

第二部では、日本のセックスレス経験者のインタビューが分析される。ここでのポイントは、日本のセックスレス「増加」が、性や主体をめぐる複合的な「力の場」で生じているということだろう。一般に流布する原因の単純化は、セックスレス現象を大きく誤解させることになる。

そのうえで、第三部で、ドイツの性文化を通して、日本のセクシュアリティの構図が明らかにされる。

日本のインタビュー対象者のうちで、セックスレスを経験した/している事例を見ると、セックスについての言語化の不足や困難という問題が見えてくる。残念ながら、非セックスレスの人びとも同様の傾向があるのかどうかは詳らかではない。ヘテロセクシュアル以外の人びとも見えてはこない。しかし、「性」の言語化の困難にかかわって、日本において一般的に、自己のセクシュアリティが漠然と捉えられており、セクシュアリティの内面化がないのではないか、という指摘には大きな意味がある。

ドイツにおける性的主体性と比べると、日本では、性意識や性行動の枠組みが、性的な主体性によるよりも、ジェンダーや社会規範から形成されている、と論じられている。つまり以下のように図式化できよう。

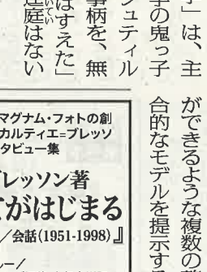
超越論性と有限性とは整合的でありうるか？

無の形而上学への序説

稲田知己

A5判変・336頁・5500円
左右社
978-4-86528-084-5
TEL.03-5786-6031

書の解釈によれば、一種の「超越論的観念論」にほかならず、『存在と時間』における「事情全体性」という概念は「カントの超越論的親和性」に比せられている。日常的な道具連関を構成する事情全体性は究極的には現存在それ自身の目的に収斂するのだが、それを確認する「操作」が「先駆的決意性」である。この操作が明らかにするのは、現存在が絶対的に自由なものとして自己の存在を了解するとともに、この自己の可能性からその他の存在者の存在可能性を開示しているということだ。つまり先駆的決意性は、「現象学的還元の改訂版」であって、それによって「現存在の存在こそが内世界的存在者一般の存在の可能性の条件である」ことが判明する。このように理解しうる『存在と時間』には「内在的な欠陥」はなく、後代のわれわれが反復できる整合性をそなえている。つまり以下のように図式化できよう。



さい、この「有限性」というのは背理であって、あくまで「メタ存在論を超越論的観念論の整合的なモデルを採用した議論として理解することには困難がある」。とはいえ、現存在「それ自身が或る存在者」と解釈すると著者は考える。

しかし、この道をハイデッガーが完遂することはなかった。というのも、「ハイデッガーの超越論性は常に有限性との葛藤のなかにある」からである。彼の思索は「存在論的な学と現存在の有限性という二動機」に突き動かされている。その他の存在者の原作者および製作者であることの不可能性」を意味する。そのため彼は「ライプニッツ」講義において「被投性に依拠した存在者論としてのメタ存在論」という隘路に陥った。つまり超越論的な問題設定からすれば、眼前の「全体における存在者」があらゆる存在了解に先行するというのは背理であって、あくまで「メタ存在論を超越論的観念論の整合的なモデルを採用した議論として理解することには困難がある」。とはいえ、この書の白眉といえるだろう。

そして本書の結論とは、「形而上学」三部作は、超越論的対象をもはや存在者として理解せず、「無」として解釈することにより、超越論的問題設定を越えることなしにカントの洞察を反復することにはじめて成功した、というものだ。ハイデッガーはカントの「超越論的対象＝X」を著者が高明なカント学者「無」として理解した。この無は、前述の隘路を乗り越えたもので、全体における存在者の根底にあって、存在者が全体において存在することを可能にする。彼はついに無二とするのは、存在者ならぬ「存在の有限性」を説いた点にあるのではないか。もし存在が時間性の超越論的地平のもとで了解され、それゆえ有限であるほかないとしたら、プラトンのイデアであれヘーゲルの絶対精神であれ、原理的にすべて破壊しうるのではなかろうか。とすれば同書の「無の形而上学」は、主観性の形而上学の鬼っ子ともいうべきシュティルナーの「私の事柄を、無のうえに、私はすえた」と、そんなに逆説はないのではないか。

いろいろ議論を尽くす必要があるにせよ、にもかかわらず本書が独創的な論考であろうことはまちがいない。前期ハイデッガーの著述のみを虚心坦懐に読解しようとし、索の事柄「有限性」については、神と人間との存在者的かつ神学的な差異として把握されているだけではないか。だがハイデッガーを哲学史上唯一無二とするのは、存在者ならぬ「存在の有限性」を説いた点にあるのではないか。もし存在が時間性の超越論的地平のもとで了解され、それゆえ有限であるほかないとしたら、プラトンのイデアであれヘーゲルの絶対精神であれ、原理的にすべて破壊しうるのではなかろうか。とすれば同書の「無の形而上学」は、主観性の形而上学の鬼っ子ともいうべきシュティルナーの「私の事柄を、無のうえに、私はすえた」と、そんなに逆説はないのではないか。

いろいろ議論を尽くす必要があるにせよ、にもかかわらず本書が独創的な論考であろうことはまちがいない。前期ハイデッガーの著述のみを虚心坦懐に読解しようとし、後年のハイデッガーの自己言及にもあえて触れない。従来の発展史的解釈は採用しない。これまでの研究では、前期ハイデッガー哲学の破綻ないし挫折を指摘することによって後期思想への移行を説明するものが多かった。そのさい、その指摘が解釈者自身の無理解に起因するということがたびたび見られるとすれば、ありふれた発展史的研究に屋上屋を架すことはあるまい。むしろ同書がこころみているのは、われわれが反復することができるような複数の整合的なモデルを提示することである。そうしてこそハイデッガーの思索を現代に活かすことができるだろう。けだしハイデッガーみずからの意向にそって、彼の全集の劈頭には「もろもろの道」という銘が刻まれていた。

（いなだ・ともみ＝国立高専機構津山高専名誉教授・哲学）

★まるやま・ふみたか＝東京大学大学院人文社会系研究科特任研究員、博士（文学）。論文に「ハイデッガーの『存在と時間』に基づく生と死の理論」など。

読書人単行本
〈決定的瞬間〉で知られ、マグナム・フォトの創始者、報道写真家アンリ・カルティエ＝ブレッソンの、そして唯一のインタビュー集
アンリ・カルティエ＝ブレッソン著
『見ることからすべてがはじまる』
アンリ・カルティエ＝ブレッソン インタビュー／会話（1951-1998）』
クレマン・シェルー／ジュリー・ジョーンズ編著、久保宏樹訳
半世紀近くにわたるインタビューを年代順に配置することにより、彼自身の言葉が、写真家の考え方の進展をも明らかにする。そこからは伝説の中に押し込められた姿ではなく、それとは正反対に生き生きとしたカルティエ＝ブレッソンの姿が浮かび上がってくる。
四六判上製・本文242頁
本体3,400円＋税
ISBN978-4-924671-49-2
【仏ボンピドゥー センター共同企画】

近刊セレクト 学術・思想
◇稲沢公一『福祉の論理』（A5・二四二〇円・誠信書房・9月上旬刊）困難な状況下でも現実を受け入れて援助を行う福祉の実践とは。
◇吉原秀編著『代理人たちの憲法訴訟』（四六・三〇八〇円・弘文堂・9月2日刊）原告の「声」を届ける代理人たち、その舞台裏に迫る。憲法訴訟の営為とその記録。
（仮題・予価を含む）